

少年に求めるは不屈と強さな女騎士は間違っているだろうか

teenout

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

所属していたファミリアが解散したので、ベル君の居るヘステイアファミリアに改宗したガチレズのグレンさん。

ベル関係で色々やらかした故にベルを育て自業自得ながら奮闘する物語。

A.I.のべりすと様で作成した2次小説を編集調整して投稿します。

目 次

初手からやらかすヒロインが主人公でガチレズ
訳分からんスキルのせいでロキ家と手合わせは糞ゲー
気づいたら色々やらかした女騎士さんは反省しない

29 17 1

初手からやらかすヒロインが主人公でガチレズ

とある朝、騎士姿の女が廃教会に足を運んでいた。

すまないこちらに神ヘスティアがいらつしやると聞いて来たのだが
いらしているだろうか？

扉を開けた白髪赤目のアルビノ氣味の少年は驚きながら神様ーと叫びながら教会の奥に行く。

その日零細アーミリアに1人の人間が加入了。
名前はグレン・アイリスフリド。髪は長く腰まであり灼熱如くに

真っ赤。目は切れ長で大きな瞳の海の様に澄んだ蒼。そんな女騎士がヘスティアファミリアに入った。

「ベルさんお疲れさまです」

そう言つて2人はオラリオにある酒場に來ていた。
今日もクエストを終えて報酬を受け取つた後だつた。

この世界にはレヘルの概念がありモンスターを倒すと経験値を得て成長すると言うものらしい。

レベルが上がるとなれば身体能力や魔法を覚えられるみたいだ。
私のパーティーメンバーであるベル君は私より3つ下のLV1だ
が敏捷が高いのか動きが速い。

彼はヒューマンで髪は短めにしている。顔立ちはとても整つてい
て可愛い感じだ。

性格も明るくて誰からも好かれそうな子だ。
そんな彼と一緒にいる私はとくに紅髪蒼目のロングヘアーレイシード。

胸はそこそこあるが私自身はレズだから彼に男性としては興味ない。

身長は高く170はあると思う。

後、チート持ちの転生者なのだが主神以外には秘密だ。

私は今19になり冒險者として働いている。

今はギルドのクエストを終え帰り道の途中だ。

私はソロで活動している。

私自身が戦闘狂なので誰かと組んで戦うよりも一人で戦つた方が楽なのだが彼の安全の為クラネル君とコンビでダンジョンアタックをしている。

「ああ～明日は取り敢えずまたダンジョンに行こうかクラネル君」「はい分かりました。でも次はどうします？　まだ僕達じや中層までは行けないですよね？」
「うむ……そうだな……」

確かに今の彼では中層の探索はまだ無理だろう。
私自身そこまで強くないので下層まで行くには厳しいものがある。
それに仲間などいない為自分しか頼れないのだ。

「よし決めたぞクラネル君」

「はい何を決めたんですか？」

「次の目標だ！　次に向かう場所は深層域にする！」

「ええ？　それって大丈夫なんですか!?」

「問題ないだろう！　ただ準備だけはしておけよ！」

「はい！」

そして翌日二人は早朝から歩みを進める。
道中進む二人。

その先に待ち受ける脅威とは一体何か……。

そしてメガネ女子のエルフのエイナにバレ説教中のグレンであつ

た。



「全く貴方達は本当にしようがないですね!!」

現在私とベル君は絶賛正座中である。

何故こうなつたかというと理由は簡単だ。

昨晩、私が深層に行きたいと言い出したからだ。
しかし流石に無謀だと思いクラネル君が止めたのだが私は止まらず強行突破したのだ。

その結果がコレである。

「いいですか！　まず最初にヘスティア様をお守りする立場にある人間が率先的に危険を招くような行動を取ってはいけないので！！
次にクラネルさんもです！　いくら千変万化とはいえ女性に守られっぱなしというのは男として如何なものでしようか！　もつと強くなりなさい！」

と怒られている最中である。

正論過ぎて言い返せない。

ちなみに私のアビリティは【騎士団】と言う。

効果は豪炎を召喚し物質化させ自由な形と簡単な能力の作成とする程度なら自分の姿を変えれる。

例えば剣士の姿を想像すれば剣も槍使いなら槍をなんなら複数の自立可能な騎士や果ては城等も創れる万能スキルだ。

何より武器という形態をとるものならば、魔法でも創造で複製可能だ。

その在り方から千変万化と二つ名を神々から賜わった。ただし欠点もある。

私の意思が弱まるとその形を維持出来ない。

その為基本ソロでのダンジョンアタックが多い。

そんな事を考えていると

「あのーエイナさんそろそろ許してもらえんかね?」「
駄目です!」

ベル君の懇願も虚しく却下された。

コレは確実に長くなるな。諦めよう(白目)

その後、30分程お小言を聞かされた。



「全くもう今日は絶対に無理無茶しないでくださいね!」

と念押しされ解放された。

「大丈夫かいクラネル君?」

「はい何とか……」

「仕方ない今日は帰るとしよう。何、魔法の騎士派遣で儲けてるから
大丈夫だよ」

転生特典の200個のマルチタスク万歳!……うん。自立可能でも意識は割くからマルチタスク必須なんだよね。

あと寝たらoutだから日帰り限定だ。

しかも騎士の実力は私と同等までだから、私より強い相手には使い捨ての壁にしか出来ないからね。

契約書はめちゃくちゃに大切だよね!

「エイナさんに強くなれって言われましたし頑張りましょう」

「そうだね……でも君には君の強くなるペースがあるから、焦つても仕方ないよ」

ホントに申し訳無い。

転生者だとバレなければ良いんだけど……。

「それにしてもグレンさんのアビリティは凄いですよね」

「そうかな？」

「はい。だつて一瞬で色々な武器を出しますし、何より無詠唱で魔法名のみの短文じやないですか！」

「ふむ君が言うならそうなんだね」

「あ！ 今僕の言葉を信じてませんね？」

「ソンナコトナイヨ」

「嘘だ！ 絶対信じてないですよ!!」

「まあ冗談はこの辺にしておいて今日は帰ろうか。代わり稽古をつけるからさ」

「あ！ 誤魔化した！」

「ほら！ 行くよ！」

「ちょっと待つて下さいよ！」

「!!？。はあ……」

「どうしたんですか？ ため息なんてついて？」

「いや何でもないよ」

今日は行かないで正解だつたかも知れないね。

派遣してた騎士達が全て何かにやられた。

派遣先の冒険者たちが騎士を囮にして、逃げてる事を祈るばかりだよ。

多分取り逃しのアレは今日だつたんだろうね。

しかも被害は原作よりデカそうだから色々ヤバいな。

しかしクラネル君の想いどうしようか。

あのアビリティの対象が私にすげ替わつて、かなり早くに発現してんだよね。私……レズなんだよなあ。

……まあ……別ファミリアだからのあれこれ無いから、主神と秘密

協定組む程度で済んでるし大丈夫かな。命大事にで行こう。

とりあえず今は明日に備えて帰つて休むとしますかね。

次の日の朝。

二人は再びダンジョンへと向かう。

クラネル君昨日の反省を生かし今日はしっかりと準備を整えている。

グレンはいつも通り布服にレザーリー系の部分鎧の軽装とマントだ。

「気を付けて行つておいで」

ヘスティアは二人を見送る。

その顔は少し寂しげであつた。

クラネル君と私はダンジョンへと入つていく。

この辺りは上層なので強いモンスターの姿はあまり見かけないが、それでも油断は禁物だ。

「えつと確か今日の目標は10階層までですね」

「そうだね。あまり深く潜ると帰りが遅くなるしね」

「では早速行きましょう！」

「うん。そうだね」

クラネル君と私は危なげ無くモンスターを狩つてゆく。

クラネル君は確かにレベル1のオールB位になつていてる。

後、私は彼の成長を阻害しない程度に、援護と戦闘する感じでサクサク道を進む。

判断力は原作のクラネル君より高い感じがするな。

アレか？ 好きな人に良い所見せ続け様としてたら、そうなつていつた感じか？ これ魔改造つてやつになるのだろうか……うん、なるなコレ。だつて稽古つけてる関係上明らかに魔改造してるわ。

あとクラネル君のステータスだが、現在【発展アビリティ】は2種類ある。

・耐異常（状態異常耐性）

・幸運である。

対異常私も持つてるが、これはあくまで副次効果であり、メインは憧憬一途の経験値獲得量の増加だ。幸運はクラネル君のオンラインワンドだからスルー。

そしてコレは私への憧憬が重要なので色々気を使うんよ。何故私はしげ替わってるかは、正直分からないし笑えない。

私にとつては大問題だからね！

と言うかレベル1で発展アビリティあるとか色々どうなってんよ。発展の意味を辞書で調べて来いや！

私は心の中で愚痴りつつ、クラネル君と共にダンジョン攻略を進める。

10階層まで来た時それは起こつた。

「うあああつ!? ？」

「！ クラネル君！」

突然、現れたミノタウロスにより、クラネル君が吹っ飛ばされた！
いやいや!!? 昨日のやつまだ居るつてロキ・ファミリアの奴らクソだろ！

くそっ！ どうすればいい？ まずはポーションで体力の回復を……つて手持ちが割れて無い！

いや落ち着け。クラネル君はそこまで酷い状態じやないし、私も余裕が凄くある。

まずはあのクソボケ牛をどうにかする必要があるな。

うんまあ……全力戦闘解禁と行こうか!!? 牛！ 往生せいや！

「来れ我が真紅よ。万軍を薙ぎ払う無双の一振りよ」

詠唱省略、魔力集中、戦意高揚

「顕現せよ。『炎帝の業火』」

私の手には灼熱の剣が握られている。

その刀身は白熱している業火に相応しい火力だ。

「騎士団」

そして炎帝の業火をナイトで創造複製しての双剣だ。うん。チートが過ぎる。

でもしようがないじゃん。

あんなもん見て冷静で居られるわけ無いじゃん。

そりや戦うさ。

私だつて冒険者なんだからさ。あと憧憬ポイント???稼ぎ!

さて、これで準備完了。

クラネル君とミノタウロスの間に割つて入る。

「大丈夫かい?」

「え」

「下がつてて。後は私がやるから」

「え、はい……」

「グオオオオオツツ!!」

「うるさいな。黙つて死ね」

私は一瞬で距離を詰め、ミノタウロスを一閃する。
その一撃は、確実にミノタウロスを灰塵と化した。
あーコレ、彼のターニングポイント消した感あるな。……どうすれば良いかな?

私は彼に向き直る。

「立てるかな?」

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ帰ろうか」

「そうですね」

私はクラネル君に手を差し出す。
彼はその手を握り立ち上がる。

「あの……グレンさんってお強いんですね」

「まあ改宗してるしコレでもレベル4あるからね」

「ええ!? ? レベル4ですか！ すごいです！」

「そんな事ないよ。それよりクラネル君はこれからが大変だろうけど
頑張つて強くなつて欲しいかな」

私がターニングポイント消したからね！ マジどうしようか。

「はい！ 頑張ります！」

ああ、憧憬増加した感ある彼が凄い眩しいよ。ホントごめんなクラ
ネル君。

現在私達は地上へと戻つている最中である。

今は5階層だが油断は出来ない。さつきみたいのが無いと言ひき
れないからだ。

個人的には、あつてくれた方が色々都合が良いのだけど、あつたら
あつたらで困るからなー。

と言うか10層にミノとか他の冒険者は大丈夫だろうか？

「グレンさん、少しペースを落としましよう。僕はまだ平気なのです
が、グレンさんの体力の方が心配です」

「ん？あ、ああいや気にしないでくれ。体力は有り余つてるから大丈
夫だよ。私としては吹っ飛ばされたクラネル君が心配なんだがね」

「いえ！ 僕は鍛えているので大丈夫ですよ！」

んう。気を使わせてしまったようだ。
これは私が悪い。

「ふむ。ではこうしようか」

「はい？」

私はクラネル君の前に立ち塞がり壁になる。

「危険と判断した場合は私を置いて逃げてくれ」

「な??何言つてるんですか！それだと貴女が！」

「いやいや、私よりも君が生き残るべきだよ。それにコレは私の我欲
でもあるんだ」

「え？」

「クラネル君は私に憧れを持つていてるね？」

「そ、それは……。確かにそうかもしません」

「それで、今君は私の後ろを歩いている訳だけれど、私の事を心配して
いないかい？」

「そりやしますよ。男ですから当たり前じゃないですか」

「うん。ありがとうございます。嬉しい限りだ。だから、その気持ちは忘れず、今
この場は後ろから来て欲しい。それに憧れてくれてる少年に、カツコ
つけたい私の我儘さ」

「わ、分かりました！僕は全力で走り抜けます！」

「うん。是非そうして欲しい」

うんうん。憧れの人の背中を見送るのも良いものだよね。
真っ赤になつてたクラネル君なんて、私は知らんよ。面倒だ。

さて、私はいたら困るミノタウロスでも探すとするか。（現実逃避）

「グオオオオオツッ！」

うおおおい!?不意打ち一閃なんとか防げたよ!?!しかも2体かよ
!

なんでいますかね!? 今さつき前後切り替えて無かつたら、危なかつたどころじゃ無いぞ！ホントふざけてるな。迷宮ってのは！

「クラネル君!? 下がれ！ こいつは私がやる！」
「はい！」

私は双剣を構え直す

「グオオオオオツッ!!」
「うるさいな。黙つて死ね。」

私は一瞬で距離を詰め、ナイツをつて瞬殺したらダメなやつ！ という訳軽くやられます。ぐぶー。やーらーれーたー。ミノより壁が痛いわ。

「グレンさん！」

「来るな！」

「え？」

「来ちゃだめ！ 絶対来ないで！」

「でも、グレンさんが！」

「いいから！ 絶対来ないで！ お願ひ！」

「……わかりました！」

ふう。良かつた。

あの子を巻き込む訳にいかないよな。……この茶番に！
ロキ・ファミリアが後ろに見えたからな。上手い事逃げてくれよミノ介君！ そしてクラネル君のターニングポイントになつて欲しい。いやマジでお願いします。

「グガアアアツ！」

「おー怖い怖い。お前のせいで死にそしだぜ」

「グガ!?」

「もう喋らなくて良いから死んでくれ。」

私は1体ミノタウロスを倒してもう1体の角を1本折る。首を狙つたけど外した風の時間稼ぎだ。で来た来た口キファミリア！ よーしょーしうん。ミノスケ上手い事逃げたな結構既にボロボロだつた感あるミノだな。

うん。口キファミリアから逃げてきた個体よな。

「すまない。此方にミノタウルスが来たと思うのだが、知ら無いか？」
「ああ来たよ2体ほどな。内一体は倒したが仲間を守りながらだつたから。なもう一体は逃げてしまつたよ」

おお、30代に見えない位フインさん可愛いな！鑑賞用に飼いたいって程度だよアレ男だからな。やはり女の子が良いよな。今度神ロキと語らうかなー。まあ決め顔は忘れて無いよ。

「そうなのか……。すまないが、ギルドへの報告もあるから同行してもらえるだろうか？」

「ん？構わないが、そちらも疲れているんじゃないか？」

さつきのマジ上手く逃げてくれ。追手かかるみたいだぞー。

「いや、僕らは大丈夫だよ」

「そうか、なら行こうか」

「いや、僕達は後から行くよ。先に行つてくれ」

追手ですね？分かります。

「ん？何故だい？」

「いや、少し野暮用があつてね。先行ついててくれるかい？」

ハイ追手確定。時間は稼いだぞミノスケ君。逃げれると良いな！

「ふむ。分かつた。では先に行くぞ」

「うん。ありがとう」

「いやこちらも助かるよ。実はちょっとヘマして身体が辛くてね。
カツコつけるんじゃ無いねハハツ」

良し憧憬はプライムしろちよい増し程度だろう。私頑張った！

「しかし、何でまたこんな浅い階層ミノタウルスがいるんだい？」
「それは俺達がヘマして逃しただけだ。ただ、追ってたらいつの間に
かここにいてな。そしたらお前らを襲つてたつてわけだ。」

ワンコ君サラツと責任逃れするね。まあ面倒し良いか。

〔成程。君はどう思うクラネル君〕
〔僕は……その……〕

おう、少年頑張れ！

「クラネル君、別に気負うことは無いさ。これは單なる事実確認に過ぎないのだから、正直に答えてくれればいいんだよ」
「は、はい！えっと、恐らくですが、この辺りのモンスターは、深層から追い出されて来たものじゃないでしょうか？」

「ほう。どうしてそう思つたのか聞いても良いかな？クラネル君」
「は、はい！え、ええと、まず、上層には殆どのモンスターがない事。次に、僕達を襲つたミノタウロスが、ミノタウロスにしては明らかに弱かつたこと。最後に、ミノタウロスを倒した後に現れたミノタウロスが明らかに強かつたことです。」

「おー。凄いなこの子。普通レベル1には分からぬぞ。やっぱ魔改造されてきてるなコレ。」

「そうだね。僕も概ね同意見だ。つまり、ダンジョンは現在進行形で拡張されていいるという事だね。」

おお。ロキファミリアさん流石ですね！自分達のやらかしを現時点ではスルーですか！

「はい！そんな気がします！」

あーこれ絶対なんか起こるよね！ロキファミリアとかヘルメスファミ
「団長！」

うわっ！びっくりした！いきなり声掛けないで欲しい！心臓止まるかと思つたじやん！

「ああ、すまない。それで、何かあつたかい？」

「はい！たつた今、ギルドの方から連絡がありまして、新種と思われるモンスターが現れたようです！」

「わかつたすぐに行く！すまない。急用が出来てしまつたからこれで失礼させて貰うよ。」

「ああ、こちらこそ貴重な情報感謝する。」

「それじゃ、またどこかで会えることを楽しみにしているよ」

「ああ、お互いな」

私はフインに社交辞令程度返す。

さてとりあえず帰るか。ロキファミリアの護衛はあるから楽だろけう。

「では我々はここで失礼しよう。」

「ああ、僕の仲間がついていくよ」

「そうか、助かる」

ロキファミリアは強い。私もそっこ戦える自信はあるが、歴戦の冒険者がいるといないとだと安心感が違う。

「では行く。君達後は頼んだよ」

「「はい」」

「「了解」」

返事を聞いた後、私達は出発した。

「ところで、貴方方は一体どこに所属している冒険者なのですか？」

道中、私に隣を走る者は質問をした。

「ヘスティアファミリアですよ」

なので普通に答える。しかし何故今聞くかね。ギルド報告時に分かるだろうに、せつかちな人だ。

「貴方の様な方が所属しているとは思わなかつたもので」「まあ、色々ありましてね」

「成程。ちなみに、どの様な経緯で入団されたんですか？」

「元々、家が竈門の神ヘスティア様を信仰していましたね。」

元いたファミリアが解散したきつかけに改宗したんですよ

「ほお。それは珍しい」

「そうなんですか？　まあ、改宗したおかげで、こうしてまた恩恵も授かれましたし、悪い話ではないと思いますがね」

「確かに、その通りかもしませんね」

「それはそうと、貴方の名前は何と言うのですか？」

「これは申し遅れました。私はリヴエリア・リヨス・アルヴと言います。どうぞよろしくお願ひします」

「これは、丁寧にどうも。私は、グレン・アイリスフリドといいます。以後お見知りおきを」

貴方じや無くて貴女だつたわ。実物割とイケメンで気付かなかつた。

コレは押し倒されたいですね。押し倒すもあります。何とかお

近づきになりたいなー

「ええ、こちらこそ、千変万化にお会いできて光榮です。」

「ありがとうございます。しかし、私の事はどうか呼び捨てで呼んでください。敬語も不要です。そちらの方が年上ですから」

「いえ、そういう訳には参りません。」

「そこをなんとか」

「そうですか……分かりました。それではグレンさんとお呼びしてもよろしいでしようか?」

「はい!勿論です!これから宜しくお願ひしますね!」

「え、ええ、こちらこそ」

ふひいゝ緊張しましたぜ!でも、これで距離が縮まりやすね!
……縮まつたよね???

で地上に何やかんやで到着つつと!まあ五層程度だし仕方ないかな

。ギルドに報告しに行くか。

「すいませーん」

「はい、なんでしよう?」

「実は先ほど、ロキファアミリアの方に頼まれたのですが……」

「わかりました。少々お待ち下さい」

「はい。」

「確認が取れました。依頼達成となります。報酬はこちらです。大変でしたね。」

で諸々報告して終了!だからエイナさん何故後ろに般若背負つてるのでしようか?理不尽なり。

訳分からんスキルのせいで口キ家と手合わせは糞 ゲー

まあまあまあまあ。疲れたもーん！ホームたる廃教会最高！

いやさ。帰還してギルド行つて報告したらエイナさんから1時間
説教つて何???

私頑張ったよ！レベル1抱えてミノスケ切り抜けとかめちやく
ちや頑張つたじやんかよー。でも般若抱えたエイナさんに生言えぬ
悲しみよな。

もういいもん寝る!!お酒ガブガブ呑んでお休みなさい!! 次の日
起きたら何故かステータス更新されていました。何があつたんだろ
うねこわくて聞けないや。とりあえず内容見てみようか。

新しいスキル生えてますなー。憧憬ヲ溜メル者つてなんぞー？

ヘスティア様ー何このヤバいしか無い名前のスキルさん……マジ
何???

「ヘスティア様新しいスキルで聞きたい事しか無いのですが、何で
しようかコレ」

「うむ。それはだな。ボクへの愛が限界突破して発現したものだぞ
！」

「ええ……。」（困惑）

「ちなみに、改宗時に『神』の項目を消さなかつたかい？」

「何でしようかソレ」

「そのせいで、ボクを信仰する憧憬g」「
で。実際の効果は？」

とヘスティア様を威圧する。神でも人間でもこういう事言う時は、
はぐらしてる時だ。なんだよ神の項目とか！こちとら知らんわそん
なもん!!?

「…………他者からの憧憬。…………つまり好きって気持ちの強さ次第でステータスが微増から大幅増するスキルだね。ベル君次第でステータスが乱高下しまくるつて認識で良いと思うよ！」

ヘスティア様が盛大にため息を吐く。可愛いマジヘスティア様可愛い。

「なんだよコレエ!!? 良い意味でも悪い意味でも悪い意味でもブツ壊れ過ぎだろ！君達何をどうしたらこんな事になるんだよ！ワケワカンナイヨ!!?」

コツチもワケワカンナイヨなんだよなあ。たしかに憧憬ポイントとか心内でふざけたけれど、えつアレで？ダンまち世界怖すぎですね。他の冒険者に嫉妬で殺されるレベルだわ。

しかも乱高下するステータスとか色々怖すぎるでしょ。最悪クラネル君次第でステータスが下がつて死ぬアビリティとかマジやべえよ。

ガチで憧憬ポイント管理つてふざけんなよ世界！

とりあえずヘスティア様にお礼言つて嗜めて街へGO！

「ふうー。今日はダンジョン行かないでおこうかな……」

いやだつてさー。あの後ギルド行つたらエイナさんめっちゃ謝つてくるし、ステータスの現状把握もしなきやだし、とゆーかクラネル君とコンビしてたらステータス乱高下する可能性有るから、コンビ解消の憂き目なんよな。

そうなるとクラネル君の安全性が無くなる訳で、昨日みたいな事起きた後だと無理筋過ぎる。

実際私の騎士派兵で一定の収入があるから無理にダンジョン行く必要無いけど、冒険したいから冒険者してる彼には無理な選択だしな。

「よし。今日も酒場行こうか。」

お酒呑んで面倒事無視！

「すいません。エール下さい。」

「あいよ。お嬢ちゃんよく呑むねえ。」

「ええ。大好きですから。」

そういうて私はジョッキ……では無くピッチャーだ。やつぱエールならピッチャーでしょ！ジョッキはワインとか用だと思う。

なお、周りの目はピックリ人間への眼差しの模様……なんで???
「よもや千変万化がヘスティアファミリアに改宗していたとはな。驚いた。かのファミリアが解散した事は聞いていたが」「私は本人から聞く機会があつたのでな。何故ヘスティアファミリアか聞いたら、生家が神ヘスティアを元々信仰していたからだといつていたよ」

おん？アレ、ロキファミリアでは？私の話かね。と言うか新種は一日で諸々終わつたのか凄いな。

「おや？グレンじゃないか。」

おおっ！なんか知らんけどリヴェリラさんにお声をかけてもらえたぞ！

ただ話の流れ的に宜しく無い感あるな面倒はきらいですよー
つと。

「それで何の話でしようか？」

「ああすまない。最近面白い噂が流れていてな。何でも改宗した途端にステイタスが急上昇するとか」

「それは面白い噂ですね。なら今は改宗ブームですか？」

前世にあつた小説の追放ブーム的なアレ感ある語感で草。

「いや、そういう訳でもないんだ。どうも特定の相手に対してのみ、効果が発揮されるらしい。例えば、とある冒険者は想い人の為に。またとある冒険者は友の為。そしてまたとある冒険者は……といった具合にな。」

「ほほう？ つまりその特定条件を満たせば効果は絶大だと？ 興味深いですね」

「ああそうだな。ただその特定条件が曖昧でな？ どうも曖昧な気持ちで挑んだ場合、効果が無いようだ。」

「ふむ？ 具体的にはどういう感じでしよう？ 恋ですかね」「いやそれがな？ 特に恋情を抱かずとも好意的感情でも効果があるらしくてな。例えば家族愛とか友愛とか親愛の類でも良いようだ。」

「なるほど。つまり恋愛だけが条件ではないという事ですか。」

「そう言う事になるな。これは中々特殊な事例だ。故に、真偽の程を確かめる為に、是非キミと一度手合わせ願いたいと思っていてね。問題は無いだろう？」

うーん。このリヴエリアさんとの手合わせフラグ……正直余り良い予感がしないんですよねえ

と言うかなんで私がそう言うアビリティ持つてるの前提なのかな思議なんですが？

いやさ、持つてるよ？ しかも憧憬限定にして、効果増したタイプ感あるやつ。

「ハハッ何故私と貴女が？ たしかに、最近改宗した身の上ですが……私が持つてるとは限りませんし、ステータス上昇が任意かも噂では分からぬでは無いですか

何より私は剣士で貴女は魔法使いです。手合わせとしても、お互いにとつて良い組み合わせとは言えないものですよ？」

きつちり断りつつもやんわりした高度な返礼！

「しかし戦闘狂とお聞きしているよ。千変万化殿。理由はなんでも良いのでは？ソレとも剣士が魔法使いを怖がるのか？」

リヴエリラさんめちゃくちゃ挑発して来るな。酔つてゐるのかね。で、他のロキファミリアの方々の感じはどうかね。

めちゃ困惑してますね。普段なら絶対しない事なんだろうな。

で神口キは

「おーおー。逃げるんか？千変万化ともあろう剣士が魔法使いから尻尾巻くんか？せやつたら次の会議で二つ名変えんとあかんやろー。なーにがええかなー。魔女の一撃とか言つてええなー」

あつ、駄目だ。ベロンベロンに酔つてる上に北欧神話系特有のノリでけしかけて来てるし、ガチで実害ある内容の嫌がらせする気満々だわこの駄女神。

受けるしか選択肢無いとか糞ゲー過ぎるわ！受けてもタイマンなら対魔法使いは勝ち確過ぎだから、興味無いけど神口キのせいで受けるしか無いな。

「ふーっ。神口キ。千変万化という二つ名は氣に入つてゐるのでな。安易に変えられるのは困る。そこまで言われたならば受ける他あるまい」

よしつー！これでもう戻り出来なくなつたぜ！あと今更だけど神口キの言う二つ名がクソダサすぎて笑うしかないんだけど、それぎつくり腰じyan。

まあいいや。じやあちよつとお付き合い願おうか！

【ロキ・ファミリア】ホーム 黄昏の館 訓練場 夜

うん。酒場の外でやんややんやつてやると思つてたよ。

これはガチガチのガチな手合わせですな。

もしやリンクコースか何かですかね？まあその場合でも、騎士団で対応出来るけどさ。

「まさか酒の席の話がここまで丁寧な手合わせになるとは思つてなかつたよりヴエリラ殿」

「それは、ちらりこそだよ」

「いやいや。神口キもであつたがリヴエリラ殿にあんな事を言われて引き下がれぬだろう」

「違ひない。では始めようか」

「ああそうしよう」

面倒だからまともにタイマンする氣無いよ。ステータス上昇？関係無いねコツチにはさ

「騎士団」

私は50体のフルプレートの騎士を創造。剣士10、槍15、重装盾5、バリスタ騎士20のガチ構成です。

「は????」

コツチは数の理を簡単に作れる上、装備と編成も自由で重装盾とか見た目ゴツいのに、最大速度は私と変わらないんですよ。

うんうん。皆、声失つてるな！騎士団の能力は私基準の上にパラメーターは、私のステータスの総量から好きに振れると言う至れり尽せりな内容だからね。ステータス上昇は普通にありがたいよ関係ない事なかつたわ。

「はあ!? 一体いつの間にそんなものを！」

「いやいやいや！ どうなつてんねんこれ！」

「うむ。素晴らしい。これが彼女の力の一端と言う訳だな？」

「あ、いや、これは……無理では？」

「…………凄いです。」

色々な反応が出始めたし終わらせるか

「全騎士戦闘開始！」

まあバリスタで詠唱妨害してその間で詰めた剣士と槍で攻めて重装盾で一応私を防御ですよ。

うん。槍騎士5体がリヴェリラさんを拘束して手合わせ終了ー。

「お疲れ様です。リヴェリラ殿」

「グレン……完敗だよ。貴方は強いな」

「いえ。リヴェリラ殿もお強かつたですよ」

「フツ。世辞でも嬉しいものだな」

いや、50体の自立騎士から良く耐えたと本当に思うよ。剣士と槍をそれぞれ半分まで削つたのは驚いた。魔法使いであそこまで近接戦えるのはマジ強い。けど数の暴力には勝てないよね。私も騎士団展開無しでされた無理ゲー過ぎる。

「団長、どうしますかあれ」

「そうだな。どうにも出来ない事は無いが、被害はデカイだろうな」

「私達が束になつてもキツイですね」

「どうしたものですかねえ」

うん。物騒な話はやめてください。君等一軍全員とやるとか無理過ぎる。たしかにかなり削りながら戦えるだろうけど、アイズとか諸々辺りの無力化に半分戦略使うからね勝てるビジョンは見えない。

そもそもリヴェリラさんが本気の火力出せば、2分くらいで壊滅する。それを思考の空白を作つてなんとかしただけだ。

今この状態だつて、私が神ロキの嫌がらせの煽りを食らつて、意

地になつてやつただけに過ぎないんだよ。

「なんでドチビのトコにこんな化け物が改宗しとるんや……」

「彼女は別格だと思うよ。神ロキ。彼女と同じ実力の者は、都市内に少ない。彼女とともにやり合えば負けるのは僕達の方の可能性はあるさ。」

「そんなんどうしろっちゅうねん」

助け舟出さないと後々面倒が過ぎるなコレ

「過大評価はそこまでにして頂きたい。そもそも対魔法使いという時点でこちらに分の有る手合わせでした。

噂で聞く分のリヴエリラ殿の魔法でも2分もあればこちらが殲滅されるでしようし、そちらの近接職がいるならばそれはより容易でしょう。

何より私そのものをやればコレらは消えますよ」

まあなんやかんやあつてロキファミリアの一軍主要メンバー対私の超絶糞ゲーをやつて負けた。

うんまあ、ゼノス辺り事もあるけど、全力全開でやつて負けたわ。まだ全身全霊粉骨碎身全力全壊ではやつて無いから、アウト寄りの

セーフ!!? セーフつたらセーフ!!?

いやね?かなり良いデータは取れたから、こつからブラッショアツプして予定よりかなり良い感じにゼノス関係迎えると思う事にしよう。

じや無いとやつてやれないわコンチクショウ!!?

「貴方は強いな。是非我らがロキファミリアに来て欲しい程だ」

おん?確かドワーフの……ガレスだね。とりま丁重に断りますか

ね

「ガレス殿。 そう言つて貰えて光榮ですが、つい最近に改宗したばかりです。

それに幼少の頃より憧れであった。竈門と炉の女神であるヘスティア様のファミリアに入り、念願のヘスティア様を主神として信仰を許されたというのに、改宗はあり得ない話ですので、その話はお断り致しますよ」

「ふむ。 それならば仕方ないが、何故最初からヘスティアファミリアに入らなかつたかが疑問になる」

「その時にはヘスティアファミリアはファミリアとしては形すら、それどころか御姿すら何処か分からずでした。

有れば入りましたが、無いならばと泣く泣くスペゲティモンスターに入つたのです。

しかし最近になつて元居たファミリアが解散した時に、ヘスティア様がファミリアをと聞きヘスティアファミリアに改宗した次第なのです

「成る程のう……確かにあの時は酷かつたからのう」

「ええ……アレは酷いものでした。」

「団長……アレとは？」

「あー……うん。色々とあつたんだよ」

なんか聞きたそうにしてるけどモンスパ様の名譽の為にこう言つとこう。

「私の騎士団がなんの意味を為さずに全てが終わつた。といえばその酷さを一端でも理解して頂けますか？」

「あー……うん。分かる気がする」

「団長、私は分かりません。」

「僕からは言えないな。リヴエリアはどうだい？」

「私は知つているが、団長が言うなど仰つているのなら言いませんよ」

で私に集まる目線の大群ですよ。とりあえず神の名誉に関わるの
で言えないとした。神口キもうんうん頷いてくれたし、そう言う事だ
からマジ勘弁な！

そんなこんなで廃教会に帰つて来ましたよ。疲れたー。んー？土
木用騎士よ。なんか用かい？……もしや!?出来たのか！アレが！
遂に！こうはしてられん！神様ー至急伝えたい事ガー！

つて事で神ヘスティアに報告したら、喜んでくれた。

良かつた良かつた。

そして神ヘスティアが喜びのあまり、抱きついて来て、勢い余つて
押し倒され、そのままほっぺにキスされた。

私は嬉しさの余りに涙を流しながら、神ヘスティアに感謝の祈りを
捧げた。

まあアレだ廃教会の下に家を作つた。つまり、地下に大規模なホー
ムを作つた訳ですよ。ああ権利関係は様が持つてたから解散前に私
が貰つて問題無し！

地下のホームは地上の10倍の広さがあるが廃教会自体は狭いの
一言だから大規模（笑）だつたりする。

更に、地上部分よりも、より広く、天井を高く、部屋数を20人分
増やし、今は無駄だが工房も設置、トイレを2箇所に増やし、風呂も
二箇所の男女別！キッチンもより大きく、より高性能に、より清潔に、
より便利に、より美しく、より機能的に、より豪華に、より豪勢に、よ
り上品に、より素敵に、より優雅に、より莊厳に、より神聖に、より
神秘的になつた。

もちろん！全てのデザイン建築に至るまで、私は関わつていない！
マジヤベースゲー。騎士団に全部丸投げしたけどここまで出来る
のかー。工事音せんなんも完璧のサイレント工事だつたしコイツら
も神か何かか？まあいいや。

取り敢えず、この完成した新しいホームを、皆にお披露目しよう。

「諸君。今日は新たな我が家の完成を祝おうではないか！」

「おおおー！？」「

「まずは玄関だ。見てくれ。いつもと同じ廃教会の玄関だ」

「「…………」」

「だが違う。これは新しく生まれ変わったのだ」

「おおー！？」

「では中を見てみよう。入つて直ぐのリビングだ。ここは今まで通りだ。ただの廃教会だ。なんなら中は全部今までと変わらない」

「おおー！？」

新しく中に作つた地下階段に2人を誘導してジャーン！

「ここからが新設したものになる。」

「おー？」

「ここが入り口だ。扉を開けて入つてくれ」

「おー！」

ギイイ

「うわー！？広いー！綺麗ー！凄ーい！」

「ふつ。そうだろ。そうだろう。全部私のスキルの騎士団がやつてくれた。なんなんだろうなこの騎士団。有能過ぎてヤバイ。魔法では無いスキルでこの汎用性は、使つている私からでも反則と言わざるをえない」

「確かに……なんなんだろうね」

ヘスティア様も不思議がる。私自身かなり不思議だ。だつて転生特典時点では魔法の括りだつたからね。何故かアビリティになつてゐるか不思議だよ。消費されるのも魔力ではなく、ＨＰとは別の普通の体力だから、実質無限撃ちのブツ壊れアビリティだ。

「え！騎士団つて魔法じや無いんですか！」

ん？ベルに教えて無かつたっけ？……教えて無いな。

「ああ、騎士団はスキルさ間違い無くね。私のイメージと起動キーに騎士団の単語がいるから、魔法に思われるが確かにスキルだよ。消費も魔力では無く普通の体力でね。つぐづく反則だよこのスキルは……」

まあ他にもブツ壊れスキルに、バトルヒーリング・至とかある。
簡単に言うと、私は白熱した双剣持ったキラーマシン毎秒体力7割回復するうえ、常時20体の普通のキラーマシンが居る感じだ。
余りに糞ゲー過ぎて笑えるよね。ロキファミリアには負けたけどな!!？

ルールが一定時間の拘束か気絶で拘束されて負けたよ。
こんなキラーマシンを氣絶じやなくて拘束出来るとか、ロキファミリアが1番のモンスター感あるよな間違い無い。

「魔法と全然変わらないのにスキルだつたんですね」「私もスパモンファミリアで発現した時には驚いたよ」

とまあ雑談を交えながら地下ホームを紹介した訳ですよ。
そう言えば明日は怪物祭だな……やっぱトマト事件アレでしたか。
明日はゆつくり教会で惰眠を謳歌するかー。
なんか忘れてる気がするなあー。うーむ分からん！寝る。以上！

気づいたら色々やらかした女騎士さんは反省しない

いやー、今年の祭りが波乱つて事すっかり忘れてた。

昼から祭り行つたらモンスターが暴れてるで思い出したよ。
ナイフ関係は多分大丈夫だろうし街にいるモンスターを狩るかな。
んで、現在ギルドに向かっている途中なのだが、何だか様子がおかしい。

街の人気が怯えているのだ。そして、その人達が逃げ来た先には、血
まみれで倒れ伏す冒険者の姿があつた。

私は駆け寄つた。まだ息はあるようだ。

「おい！しつかりしろ！」

「ああ……あんたも逃げな……。ここはもうダメだ。俺の仲間は全滅
した。あのミノタウロスに殺されたんだ」

は？ミノタウロス？でもこの人レベル3の？スター・ダスト？だろ
！？

なんでミノタウロスにやられてんの？

「一体何故！」

「アイツは……突然現れた。そいつはあつという間に仲間を皆殺しに
した……！俺は何とか逃げたが……くつ！」

スターダストのパーティーは全員レベル3だつたはずだろうが！

この前、弱者救済の騎士派遣をポーターアとして使いたいって言つて
来たから覚えている。

勿論断つたがレベルの実力にウソはあり得ない！……あり得ない
んだ。

ミノタウロスにやられたはあり得ない筈なんだよ！？しかし、現に
彼は死にかけている。

何かがおかしい。だが……そんな事はどうでもいい！
「お前は死なせない！」

私は彼を担ぎ上げ、全速力で走つた。兎に角距離を取らねば！ 私
は走りながらポーションを取り出し、彼に飲ませて安置した。
「うつ……」

「気がついたか？」

「アンタが助けてくれたのか？」

「ああ」

「助かつたぜ。ありがとう」

「礼はいらん。それより状況を教えてくれないか？」

「分かつた」

しかしさつきと大して変わらない内容だつたが右目が無かつたそ
うな。

…………そういや逃したミノ右目無かつたね???
いやーいやいや、色々おかしいって！

短期間に強くなりすぎでしょ!!?

何なの？なんで急に強くなつたの？ 私に勝てなかつたのに??

でも、確かにあの時私は全力じや無かつた。

本気でやつたけど、本気じや無いからね！……嘘です。半分くらい
はマジだつたかもな。

勿論茶番にな！

やつべーこれやらかしたわ。完全に私の責任じやん。

でもまあ、流石に私もそこまで鬼畜じや無いので、ちゃんとフオ
ローは入れよう。

しかしレベル3パーティーを単体テスト壊滅出来るとかヤバ過ぎ
だろ。これはいよいよ私が出るしか無さそそうだな。

私が負けるとかあり得んからな。

ミノタウロスの奴、私のお気に入りの店に嫌がらせしやがつて!!

(現実逃避)

絶対に許さん!! ふう、ちょっと落ち着いた。

やあ、くそミノタウロス君どうやつて街まで来たか知らないが、ク
ラネル君の糧にならないならば用は無いから消すねー。私はミノタ
ウロスの前に立ち塞がり、話しかけた。

「貴様がミノタウロスだな」

『ヴモオオオ!!』

「ほう

なんかオーラ纏つててヤバみ。いやーキマつてますなー。

いやーコレは強敵だな。

「良いぞ、来い」

ミノタウロスは雄叫びを上げながら突進してきた。

そして拳を振り下ろして来た。

速いな。

避けても良かつたが騎士団で盾を創造して受けた。

ドゴンッ！　おお、凄い音。

衝撃で少し後退するが問題ない。

私は剣を創造して構えて突撃した。

ミノタウロスが腕を薙ぎ払つて来たが、私は跳躍し回避した。

そのまま空中で一回転し、上段からの斬り降ろしを放つた。

ミノタウロスの腕を切断する事に成功したが、直ぐに再生???

W A T S ???

意味分かん無いよ。何それ魔法なの？　そんな事より今のうちに攻撃だ！　私はミノタウロスを蹴飛ばし、更に追撃を加えようとした
ら……目の前にミノタウロスがいた。

「!？」

私は咄嗟にバックステップで回避したが……殴り飛ばされた。痛いなあ。何今の？瞬間移動したよね？　ええ……アレ絶対ヤバイでしょ。

私はポーションを取り出し飲み干した。

「チイ！」

今度はこちらのターンだ！

「騎士団」

勿論10体規模の自立騎士だ。しかもただの騎士ではない。ドラグーン騎兵である。

ミノタウロスが殴つただけで最前列が吹き飛んだが、火力にガン振りしてあるから問題無い。

「撃て！」

一斉に砲撃を開始したが、やはり効果は薄い。薄いが効いている。だが、ダメージを与えたと言うよりも、動きを止めたと言った感じだろうか。

だが、十分過ぎる！ 私はミノタウロスに向かつて駆け出した。ミノタウロスがまた何かをしようとしたので、足を騎士に止めさせ、隙だらけになつた腹に思い切り炎帝の業火を叩き込んだ。

「爆ぜろ！」

その言葉と共に爆発が起こり、ミノタウロスは木つ端微塵となつた。

うーん、思つたより弱いな。

「ふむ、こんなものか。……ん？」

気がつくと周りに人が集まつていた。……からの大歎声。

うわつ迫力が半端無いね。皆口々に叫んでいるが、特に多いのは「ありがとう」「流石だ」といつた声だ。

お礼なんて要らないよー。まあ、悪い気しないけどさ。

しかしアレは脱走した奴じやない。

ダンジョンから出てきたであろう奴だ。

しかも今まで気づかれずにだ。何かある筈だ。

取り敢えずギルドに報告するか。

私はその場を後にした。

私は冒険者ギルドにやつて來た。

受付嬢にミノタウロスの事を話すと、直ぐ様対応してくれた。

うん、あれ脱走とは別口のミノだからね。

神ガネーシャの所に連絡いつてそつからまた違うのでつてなつてると思うけど、まあいいや。

他のやつら狩りに行こつと！

なんか緑の硬いワームみたいなのがいたけど、サクッと炎帝の業火でこんがり焼き切つた。

剣姫が先に戦つてたけど剣。ボキつてたから即で加勢したわ。

ワームの割に良く燃えたね植物みたいな感触だつたよ。

……このサイズをどうやつてシヨーにするのか疑問しか無いな。
なんやかんやあつてホームに戻つたらじやがまる君パーティーになつてんのなに??マジ何??

うん?何?

クラネル君がシルバーバック倒した記念会かあ。そつかあ。

完 全 に 忘 れ て た 。

ヘスティアナイフ今日じやん!

見逃したーー!

で食べ終わつてからでクラネル君からもつと強くなりたいと半泣きの相談があつた。

なんか色々言つてた氣するけど要は神様からの武器が無ければ神様を失つてたかも知れない。

だからもつと強くなりたい!つて事だつた。

「クラネル君強くなりたいと言う事は良く分かつた。

だがな。

別に情けたくつていい。

立ち止まつて後ろも見ても良い。

後ろ見てるのに座つても良いし寝ても良い。

ちゃんと立ち上がり、また前を見て歩ければ良いんだ。誰だつて最初は弱いのだからな

「そうでしようか……」

「ああ、そうだとも! そして何度でも立ち上がり、歩き出すのだ。

そうだな。歩くまで誰かと共に過去を語らうのも良いな。

未来を話し合えと言う輩もいるが挫けている時は過去を語らう方が楽しい。

何、いずれは仲間も出来る。

色々有るだろうが過去なんて全部笑い話になるさ。

いいか。強いと言うのは腕っぷしじやない。心だ。クラネル君

クラネル君は真剣な眼差しで食い入る様に聞いている。

「不屈だれ。幾らでも挫けたまえ。

幾らでも過去を振り返れ。

座り込んで泣いていい。

大丈夫だ。挫ける頃には仲間がいる。

今だつて私がいる。

安心して挫けたまえ。

不屈と言うのはな。

挫け無い事では無く諦め無い事なんだ。

諦めずに立ち上がつて何度も歩き出せる事を言うんだ

クラネル君の目からは涙が溢れていた。

「うう……ありがとうございます……。僕、頑張ります！」

「よし！その意気だ！さあ、明日に備えて休むぞ！」

割とテキトーで云つてわかつて無いクラネル君さあ。

強くなりたいつて言われてるのに心だ！不屈だ！挫けろ！つてアホかよ。

しかも泣くとかメンタル弱すぎだし、泣いたら強くなれるとか思つてんじやねーよ。

まあ、私なんだけどね！ まあ、アレだよ。

私は私の好きなように生きるだけよ。

エイナさんには訓練かなりスバルタにやつてません？って言われる位やべえ成長してるから、十二分に強くなつてんよ。

まあ、騎士団の騎馬騎士突貫に耐えろとか、私の双剣乱舞捌けとか、騎士使つて私に一撃入れるとかやつてるけどスバルタじやないでしょ。

スバルタつてのは半殺しした上で2、3人と乱取りしたり、サンドバツグにされたり、MAP兵器宜しくブツパ耐えろとかだしな！

スマモンファミリアの訓練はそうだったし、今はめちゃくちや優しい手解きしてるよ！ エイナさん!!?

……現状でオールBは謎に発現したアビリティのせいだろ。

さあ寝よ寝よ。すやー。

なんやかんやあつて仲間ゲットした模様。

確かアーデ君だつけな。

さつそく振り返った時に笑い話なるあれこれがあつたらしい。

ソレ、笑い話になるかなあ？

かなりエグい裏切りよな？

前世でも思つてたけど今でも言えるわ。

お人好しが過ぎる！でもクラネル君良い子だからなあ。

取り敢えず一緒にダンジョン潜るみたいだけど、クラネル君に寄生するなら始末だけど原作通りなら大丈夫だろう。

……既に原作から乖離して強さだけランクアップしたら誤差でしょ！

この前、捌き技として万象の杖を教えた後、普通に出来てたけど誤差誤差！

誤差……じゃないよなあ（白目）

アレ魔法無効防御でカウンターも出来るブツ壊れ対魔法防御技だもんない。

サンチンと合わせた魔改造技だから対物理も出来る訳だしな（諦）アニメの3期当たりの時期で取得する頃合いだろつて感じで教えたら出来ました！て何？マジ、何???

アレで冒険者の才能無し???見る目無さ過ぎだろお爺さんや。

この前はグリモア読んで魔法ゲット！とかしてたしさあ。

まあアレどこぞ美の女神の仕業なんだが、コレは私のやらかしだな。

で、なんか両腕に花みたいな感じになつていてるクラネル君よな。おっぱいふにふに戸惑つてて草。

即でエイナさん理由にして逃げつてたけどな！

まあそんなこんながあつて翌日である。

クラネル君ウツキウキンよ。

また翌日の夕方には修羅場つてんの草。

そんなクラネル君をよそに私はダイダロス通りの娼婦街に来ました。

娼婦街と言つてもパツと見は普通の民家しか無いけどね。が、コツコンとリズム良く扉を叩くと

一
いらつしや
い

となります訳です。

でレズるんだけど同性相手させるから倍額を前払いして渡す。

別に相場通りで良いけど、やつはこういう事しだいたらサービスが良い訳です。「じゃあ頼んだー

「お二階」

後は部屋に入つて待つだけ。

まあ暫くするとカチャンと音がして鍵が開く音が鳴る

「おう」

私はそのまま部屋の中に入る。

(○、^○) あゝ気持ちいいんじや～

濡れ場???ねーよ!!?

夕ウナリ系の欠損美少女ではあるた
ン

ノハヤンの三歳の時のいと仲間かいと
貴様の單いで色々

さてアビリティオールSでそろそろレベル5

馴染みの酒場で馴染みの面子に会つてだな。

「なあ、頼みがあるんだが？」

「ん? 何かしら? 何でもござりて頂戴」

「へえ……良いわよ。貴女となら大歓迎よ。」

「助かるよ。30階層で狩りをしたくてね。

「あら、貴女の実力なら余裕でしように。」

まあ、それなら私達が居る必要は無いと思うけど、それでも良ければ同行するわ。

報酬は弾んで貰うけどね！」

「勿論だ。それでどうだい？」
「ええ、構わないわ。」

「じゃあ明日の朝ダンジョン前で待ち合わせだ。宜しく頼むよ。」

翌朝、朝飯を食べてから宿を出てダンジョンに向かう。

既に約束の時間なので、2人は待っていたようだ。
2人とも美女なので目立つ二三三の女らしい。

取り敢えず合流出来たので早速ダンジョンに潜る。

道中は私が先導して歩いた。

2人とモレヘル3だから害と戦える

馬二回で武器を渡してあるのもあって強い強い

能力がある。

そしてコレ部分的にステータス上乗せされるんよなあ。

武器ならまんまと武器が強いと済むけど、防具……特に全身鎧の類は

乗車者はノルマに外れがそのまま乗るのよ

まあ、貸してんの武器だから強、武器で済む…………済むかぬ????

……で着いたの良いけどコレ深層のモンスターのスタンピードし

てませんかね!!? しかも何気にドラゴンとかも混じってるやんけ!

いやエリックも混ざってるし何このオーリアタリ軍団!!? 未知

豈に酒口の酒一升を過すべ

はーい冒険者諸君こつちからは安置だよ。

「騎士団。大城壁！」

トリンと立派な坂壁が一瞬で出現はいい見ても圧巻よな

ね掛けでひとつ飛びよ。

あの壁向こうは簡易たか安全地帯だ！

小隊！

ズラつと騎士の壁と言う第一の壁よ。

「全軍向かい撃て！一体も通すな!!?」

さて、じゃあ私は前線で暴れるとしますか！

「全員突撃せよ!! 蹤躡しろ!!」

こうして私のスタンビート戦は始まつた訳ですよ。
騎士小隊達最初は押されていたが徐々に押し返している。
やはり安定したレベルとステータスが高いと違うな。
で、私はと言うと「セイツ!!」
絶賛無双中である。

スキル全開で特大剣2本ぶん回して敵ぶつ飛ばしてる。

スキルの烈火なる者で髪は燃える様に鮮烈な真っ赤に発光。
お目目も爛々と揺れる火の如く発光。

あと、ちょいハイテンションになる位だな。

まあ、景気が良い肉盾やりながら最前線で特大双剣ぶん回してのバ
力は私です。

ゼノスいたよ？即で撤退してたけども！
まあ分かる。

バカでかい城壁で後列は安置で最前線はなんかはやべー奴が血風
撒き散らしながら無双してんだもんな。
助太刀する要素皆無すぎる。

因みに騎士団の装備はレベル分ステータスが乗るので相当の強さ
になる。

つまり騎士1体で深層のモンスター10体以上を余裕でキル出来
る。

なので、私が騎士団出してきた時点ではぼ勝ち確である。
全身鎧の上に剣と大盾のレベル4のステータスの上乗せて2小隊

分の騎士だ。

余裕すぎよなあ。

偉業取れる???無理そう???無理かなあ（諦め）

大体狩り終わつた当たりで

「グレン避難は終わつたわ後は貴女だけよ」

と魔石でパンパンのバックパック持つたサポーターちゃん達が来

た。

良しなら撤退！一応騎士と壁は残して撤退！流石にもうちょっと狩れるけど、命大事にだな。

ダンジョン外まで撤退し終わって一息ついた。

「ふう、今日は良い稼ぎになつたな。」

「貴女相変わらず凄いわね。普通なら深層のモンスターを単騎で狩るなんて無いのよ？」

うんまあ騎士団で創成した装備群あるし、ステータス爆盛りだし、と言うかふざけ倒してる憧憬うんたらさんなスキルで城壁以降はアホみたいなステータスの感覚だつたからね。

「私だからだよ。あつ報酬は山分けだからね等分だよ。

拾わずに戦闘出来るのはやつぱり楽だからさ。ありがとう」「

「当然の働きをしただけだもの。私達は何もしてないわ」

「それでもさ」

そんなこんなで分かる山分けしてサポーター役達と別れた。

帰り道では特に無く廃教会（地下魔改造）に帰ってきた。
で落ち着いて思つた事。

なんで過ぎてる筈の30階層のヤツが今あつた??ズレエグ過ぎない???

ソードなんてかのアイズ君と言うかその当たりどうなつてんの？

……怖。うん？遠征どうなる？分からん。

あつ神さま。ただいまです。

はい問題ありませんでした。ステータス更新よろしくお願ひします。

えつなんか問題あつただろつて？

いえ私には問題では無かつたので問題ありませんでした。

少し疲れはしましたがその程度ですよそんなワタワタしないでください。

ふいー。神さまの詰問クリアー。

嘘はついて無いからマジクリアよ。

で、レベルアップも果たした。

ウエーイ！レベル5じゃーい！

ベル君さアホみたいなレベルアップ速度だからレベル4は不安だつたんよなあ。

まあレベル5にもすぐ上がつて来そだから笑えない訳なんだが
???

で、スキルはつと……うわあこれはまた……。

「…………」

うん。ヤバいなコレ。

ほら神さまもダンマリ真顔になつてらつしやる。

「一緒に見てるから分かつてんだろうけど、グレン君キミのステータスにまた変なのあるね」

「ありますね。烈火なる掲旗と言う魔法が……。

詠唱文からして自らを含めた全体強化と全体回復等でしようか？」

回れ廻れ舞われ我が同胞達よ。汝らは烈火の徒なり。

其の身朽ち果てるまで踊り狂いて死地にて敵を討て。

その身の穢れは烈火に焚ベよ。

その身の傷は烈火に焚ベよ。

その魂は烈火に捧げよ。

さすれば我是力を与えよう。

我是炎獄の覇者なり。

我が命ずる。我が身と魂を糧とし。

全てを焼き尽くせ。

共に踊り明かそう。

共に血風を吹かせよう。

風に揺らせ揺らせ。

我が剣をここに示めそう。

我らの剣ここに示されよ。烈火なる旗を掲げて。

「ふむ。中々に壯觀ですね。」

「ああ。凄まじいものだ。」

「確かに素晴らしいですが。これ。

私のステータスで使った場合どうなつてしまふんでしょう?」

「……」

「……」

まあ大丈夫でしょう。きっと。

そう思いたい。

きっと、多分、めいびー。